

1990年には臨時雇用者の時給は380円ほどであった。しかし近年に大郷町ヘトヨタ自動車工場が進出し、これに労働力が流出し、近隣の時給単価も上昇する傾向にある。このため練り製品加工企業における労働力確保がより困難になる傾向にある。

練り製品製造業の雇用労働力には中高年の女性が多い。水産加工に関連する企業での就労では製造工程における臭いが強く、よごれが身体につくことも多い。このため若者などに就労を敬遠される傾向にある。このため水産加工業労働力の著しい高齢化が問題になりつつある。

資本金別の水産加工業の企業を見ると、最大の企業で資本金は4,000万円となっており、この企業を含めて1,000万円の資本金を越える企業は僅か9社であり、練り製品製造企業では零細規模の企業が多く立地している。

これまでの移転の有無についてみると、移転経験のある企業は27企業となっている。移転先は水産加工団地のある新浜町へ11企業が移転し、その他は比較的分散している。水産加工団地への移転が主になされたものの、埋立地であるために地盤の不等沈下が著しく、各企業はその対策に追われている。また、移転の理由として、敷地が狭いという理由を上げた企業が7企業と第1位であり、塩釜市の平坦地の狭隘さがここでも移転理由となっている。

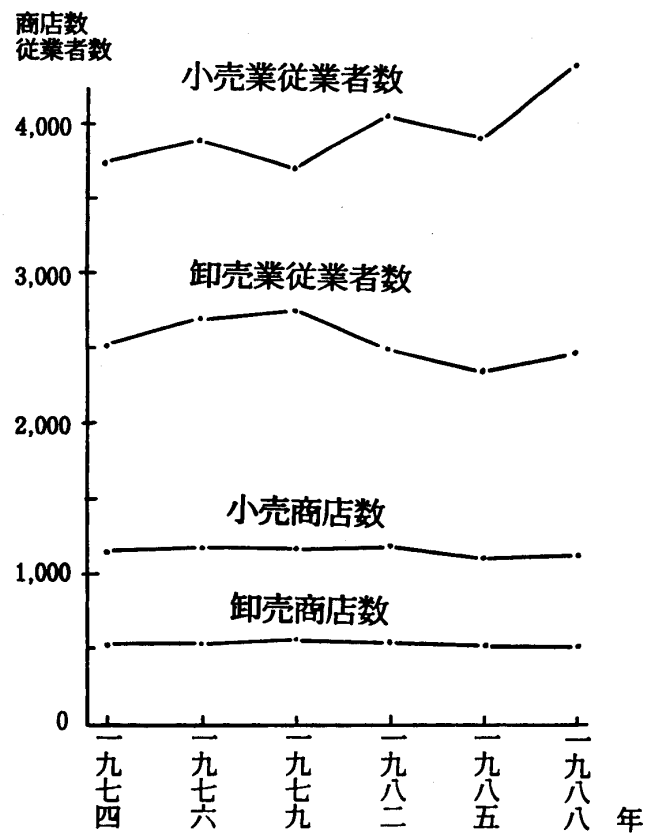
塩釜市では、かつて塩釜蒲鉾連合商工業協同組合も率先して大手資本の蒲鉾製造への進出を阻止する運動を起こしたように、練り製品加工業者が大手資本による下請化防止に配慮している。しかし、1980年代後半頃から紀文や丸紅などの大手資本が進出しつつある。1990年では、大手資本の子会社は紀文の傘下にある1社のみとなっている。

塩釜市の練り製品製造企業は練り製品のブランドを塩釜市全体で統一する意志が希薄である。個々の企業が独自の商品開発を行い、生産・販路開拓の能力をもっているため、業者間での団結があまりみられない。このことが、塩釜市で生産された笹蒲鉾が

仙台銘柄で販売されているという現状の改変を妨げている。このように各企業の独自性が強く、企業間の技術交流は少ないものの、5～6年ほど以前から若手後継者によってお互いに競合しない練り製品については技術交流がなされるようになってきた。最近の動向としては、揚蒲鉾の産地として、統一銘柄の製品をつくろうとする動きもみられる。

5 商業

塩釜市の商店は本町を中心に発達してきた。ここで商業統計により1974年以降における塩釜市の商店数・従業者数・年間販売額の推移をみよう。まず、卸売業・小売業の商店数をみると、これは最近ほとんど変化しておらず、1988年には卸売商店数が511、小売商店数が1,124となっている。(図IV-9)。1988



図IV-9 塩釜市における商店数と商業従業者数の推移

資料：商業統計により作成。

表IV-5 塩釜市の小売業構成比 (1988年)

産業分類	商店数割合	従業員割合	販売額割合
飲 食 料 品	45.6%	43.9%	42.4%
燃 料	5.6	8.8	18.8
衣服身の回り品	15.7	12.0	8.9
家具・建具・家庭用機械器具	6.0	6.5	5.5
自 動 車	1.4	2.7	2.8
書籍・文具	3.6	6.0	2.6
医薬品・化粧品	4.1	2.5	2.2
そ の 他	18.0	17.6	16.8
割合の合計	100.0%	100.0%	100.0%
実 数	1,124店	4,380人	7,043,689万円

資料：商業統計調査により作成。

における小売業商店の内訳をみると（表IV-5）、飲食料品店が全小売店の45.6%と、全体の半数近くを占めており、ついで衣服・身の回り店が多くなっている。

つぎに従業員数をみると、卸売業に従事する人は1974年の2,690人を最高として、以後、減少ないし横ばいの傾向を示し、1988年には2,461人となっている。一方、小売業者数は1974年以降増減を繰り返しつつ、全体としてはやや増加しており、1988年にその数は4,380人となっている。すなわち小売業に

おいては1店舗あたりの従業者数がわずかながら増加している。しかし1988年には、卸売業と小売業の合計1,635商店のうち約半数強の868商店は従業員1～2人の商店である。一方、30人以上の従業者が働いている商店は23にすぎず、塩釜市では小規模な商店が多い。なお、小売業の従業員割合をみると、商店数の多い飲食料品店や衣服・身の回り店で働く人が多くなっている。

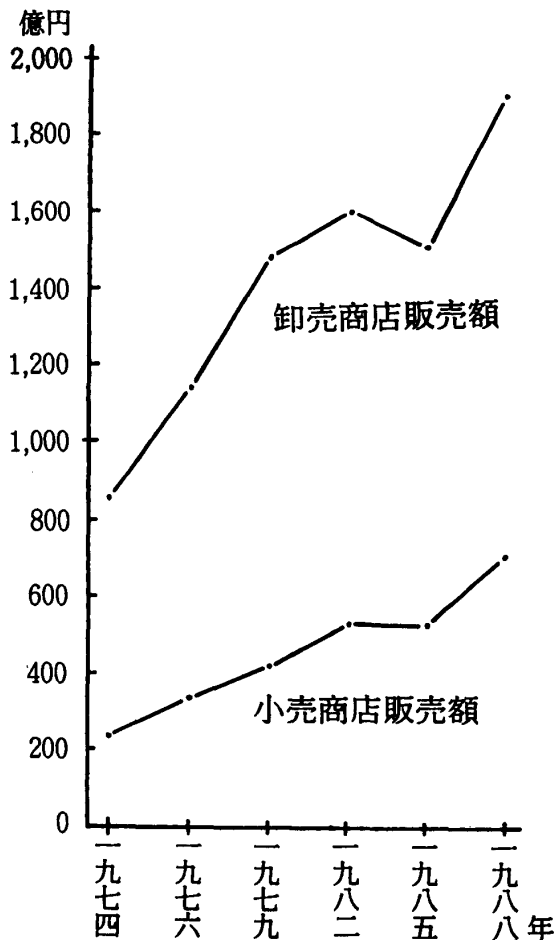
塩釜市では小規模な店が多い中で、大規模小売店も立地してきている。塩釜市における最初の大規模小売店は1969年に新富町で開店したトーコー塩釜店であった（表IV-6）。このあとに進出してきた大規模店がジャスコ塩釜店である。ジャスコ塩釜店は仙石線本塩釜駅前の海岸通に立地しているが、この場所は塩釜市の都市計画事業による商業地域拡張用地として埋立造成された土地であった。この土地の払い下げによる入札に応じたのはジャスコのみであり、ジャスコは1974年10月に5階建てで、売場面積6,885㎡の塩釜店を開店させた¹⁰⁾。以後、第一種・第二種大規模小売店や生活協同組合を含めて11の大型店が塩釜市に開店したが、最大の売場面積をもつのがジャスコ塩釜店となっている。

表IV-6 塩釜市の大規模小売店 (1991年)

種類	店 名	立地町名	売場面積㎡	開店年月
第一種 大規模 小売店	トーコー塩釜店	新 富 町	2,061	1969年7月
	ジャスコ塩釜店	海 岸 通	7,443	1974年10月
	今 野 屋*	本 町	1,789	1975年8月
	ヨークベニマル	野 田	2,500	1984年4月
	ハーツマネハラ	中 の 島	3,750	1988年6月
第二種 大規模 小売店	横 田 屋*	本 町	1,488	1985年11月
	大 泉 マ ー ト	花 立 町	571	1977年4月
	エ ス ポ ー ト	本塩釜駅構内	882	1982年3月
生活協 同組合	みやぎ生協塩釜店	玉川三丁目	775	1976年11月
	みやぎ生協庚塚店	庚 塚	860	1982年10月
	みやぎ生協藤倉店	藤 倉 二 丁 目	485	1983年11月

注：*印の2店は1992年に倒産している。

資料：塩釜商工会議所・中小企業相談所（1988）：『塩釜の商工業』p.7、塩釜地域商業近代化委員会（1990）：『商業近代化地域計画報告書（基本計画）』塩釜商工会議所，139、および聞き取り調査により作成。



図IV-10 塩釜市における商店数の年間販売額の推移

資料：商業統計により作成。

つぎに塩釜市における商業年間販売額の推移をみると（図IV-10）、1974年以降物価上昇などもあって販売額は増加してきたが、1985年にそれがやや減少した。この理由は、この頃に漁業規制などがあって漁業がやや不振で、さらに塩釜港に寄港する漁船への燃料販売額が大幅に減少したことによる。しかし1988年には卸売・小売の販売額は再び大きく増加している。

1988年の商業年間販売額をみると、卸売業年間販売額は1,904億円で、この67.9%を農畜産物・水産物が占めていたが、塩釜市では農業が振るわないことから、水産物の占める割合が非常に大きくなっている。一方、小売業年間販売額は1988年に704億円を超えているが（表IV-5）、飲食料品の割合がそ

の42.2%を占め、ついで燃料の割合が18.8%、衣服・身の回り品が8.9%であった。なおこれらの中には産業小分類で統計上明らかにできない百貨店・スーパーマーケットの販売額が含まれていないが¹²⁾、これらの商店における売上げの内訳をそれぞれの分類に区分けすると、飲食料品や衣服・身の回り品の割合はさらに大きくなると思われる。

ところで塩釜市の商店はかつては塩釜市とその近隣の二市三町（塩釜市・多賀城市・松島町・利府町・七ヶ浜町）を商圏としていた。しかし、それぞれの市町で商店街が発達し、各地で大規模小売店が開店したり、さらに仙台市の中心商店街の商圏が拡大するにつれて、塩釜市の商店の商圏は縮小してきたのである。塩釜商工会議所による塩釜市民の買物動向調査によれば¹³⁾、魚・肉・野菜などの生鮮食料品や家庭用品、肌着・シャツ、医薬品などの最寄品については地元の商店で購入すると答えた塩釜市民が多かったが、高額な洋服や時計・メガネ、寝具、文化・スポーツ・レジャー用品、贈答品などの買回品は仙台市の中心商店街で購入するという塩釜市民が多くなっている。すなわち塩釜市は仙台市の商圏に完全に組み込まれているのである。

卸売・小売商店とともに商店街を形成する一般飲食店をみると、商業統計によれば1989年に塩釜市には212の一般飲食店があり、それらの従業員数は730人であった。一般飲食店の内訳は不明であるが、その店数と従業員数は1982年の調査以降減少してきている。なお、バー・酒場などのその他の飲食店の数などは不明であるが、これらの店は塩釜市では尾島町に多く集中している。

小売商店や飲食店などは各通りにごとに商店街振興組合や商店会を組織している。すなわち塩釜市ではもともと商店街振興組合のほかに、13の商店会が存在している。これらの組合は塩釜商工会議所とともに商業の近代化や売上向上をはかっている。しかし1992年における塩釜市内の2件の大型店の倒産や、仙台の商店の商圏拡大、多賀城市などにおける大型

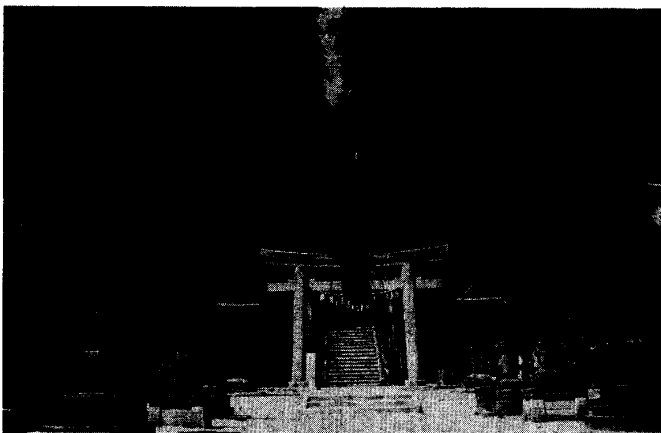
店の出店もあって、塩釜市の商店街の振興には難しい点が多い。特に塩釜市では高級買回品の価格や品揃え、店構え、駐車場の確保などの交通問題で立ち後れた感があるといわれ、これらの改善は今後の問題となっている。

6 観光業

塩釜市の観光には塩釜神社参拝、船を利用したの松島湾内の島を中心とする景観観察、民宿などを利用しての海水浴や釣、各種の祭、工場などの見学、水産物などの買物ツアーなどがある。ここではこれらについて考察してみよう。

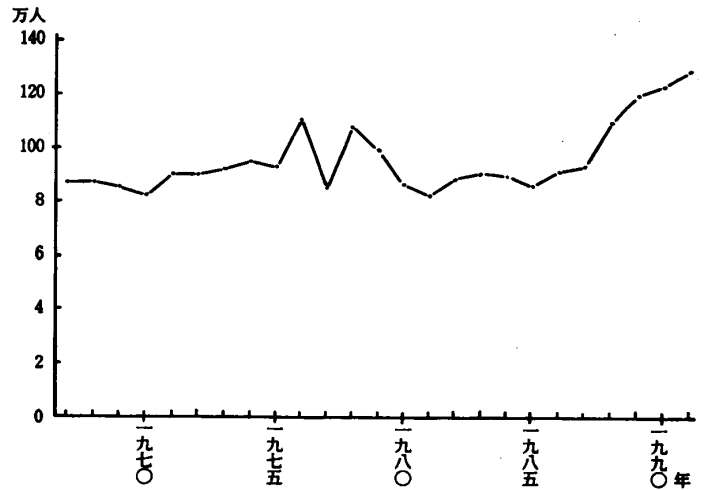
(1) 塩釜神社観光

塩釜神社は陸奥の国一宮である。神社には正一位塩釜大明神が祭られ、この神は海上安全・豊漁・安産の神として知られている。塩釜神社に対して市民の信仰にも厚いものがある。塩釜神社の本殿は市の中央部の丘陵上に位置している。塩釜神社の東隣には志波彦神社が併せて祭られている。また神社の境内には塩釜神社博物館や社務所などがある。しかし塩釜神社の表参道（写真Ⅳ-1）付近や周辺地域ではいわゆる門前町が現在は存在していない。また塩釜神社に関連した土産物店も地域にまとまって存在



写真Ⅳ-1 塩釜神社表参堂

塩釜神社は写真正面の階段を上った所に位置している。(内山撮影)



図Ⅳ-11 塩釜神社の年間参拝客数の推移

資料：塩釜市の統計により作成。

しない。このようなことは他の有名な神社仏閣をもつ地域と比べて異なる点である。

塩釜神社への参拝客数は塩釜市の統計によれば、1960年代後半以降ほぼ横ばい状態であったが（図Ⅳ-11）、最近の数年間はやや増加傾向を示している。1991年には参拝客数が1,289,901人に達している。参拝客数を月別にみると、毎年1月に初詣としての参拝客が集中している。すなわち1991年をみると年間参拝客の52.8%が1月に集中している。さらに参拝客は1月のうちでも1～3日に集中し、年間参拝客の42.5%がその3日間に集中している。1月について参拝客が多い月は11月であり、年間参拝客の7.1%を占めている。これは七五三による参拝客が多く占めている。

塩釜神社への参拝客の出身地をみると、その34.5%が宮城県内の客であり、さらに東北地方の客を加えると51.7%に達している。ついで関東地方からの参拝客が33.4%を占めている。

以上のように塩釜神社の参拝客が正月3日間に集中し、地元県内の参拝客が多いことからみて、塩釜神社は地元に着した神社であるといえよう。

(2) 松島湾の遊覧船観光

塩釜湾から松島湾に続く地域は沈降海岸地形で、湾内には仁王島などの島々が浮かび、これらの島々の景観が良く、この地域は景勝の地として知られて